地域における市井の研究成果の電子アーカイヴ化とその教育的活用
―鹿児島県立種子島高等学校における『種子島研究』を題材として―

出口 英樹・日髙 優介

キーワード：市井の研究成果、地域研究、電子アーカイヴ化、地域活性化

概要

鹿児島を代表する民俗学者である下野敏見（1929年－2022年）は、地域に関する多くの蔵書や民俗資料を残した。現在、その膨大な量の資料のうち種子島に関する資料については、西之表市が所有し、その管理下に置かれ、整理を待つ状態である。

また、下野は高校教員時代に県内各地に赴任し、生徒とともに郷土に関して調査・研究を行っていた。鹿児島県立種子島高等学校教諭時代にも同校に郷土研究部を作り、その研究成果を『種子島研究』という冊子にまとめていた。この『種子島研究』は、高校生が作成したものとしては質量ともに素晴らしい内容であると評された。

だが、『種子島研究』第１号の刊行からちょうど60年が経過し、その冊子自体も多くは現存しておらず、残されたものの保管状態も必ずしも良いとはいえない現実がある。また、そのような状態であるため、この冊子を地域の学びや活性化などに活用するという動きもほとんどみられない。

以上を踏まえ、下野の遺した貴重な遺産を探索し、可能な限り電子アーカイヴ化を行い、学校教育や社会教育における教材として活用できるようにすることを目的として調査および研究活動を実施する。これは、「地域の財産」である重要な文化資源を保全し活用を目指すプロジェクトである。

その第１歩として上記の『種子島研究』に焦点を合わせ、以下の活動を行う。すなわち、①冊子の所在と状態を確認する、②その通巻の内容を整理する（総目次の作成）、③可能な限り当時の執筆者を訪ねヒアリング調査を行う、④その内容の電子化を進めアーカイヴする、⑤このアーカイヴを活用するために必要な法的処理（権利関係）の整理を行う、⑥実際に学校教育にこれを活用する、⑦将来的には種子島の地域活性化に資する活用の提案を行う、である。

Ⅰ．課題意識

鹿児島を代表する民俗学者である下野敏見（1929年－2022年）は、地域に関する多くの蔵書や民俗資料を残した。ここでは仮にそれらを「下野コレクション」と呼称する。

下野コレクションのうち種子島に関する資料については、下野の遺族と種子島の西之表市との間で契約が交わされ、その所有権が西之表市に譲渡された。2023年11月現在、その多くが同市の「種子島開発総合センター『鉄砲館』」に移送され、保管されているものの、まだ鹿児島市内の下野の邸宅に残されている遺品も数多い[1]。

また、下野は高校教員時代に県内各地に赴任し、そこで生徒とともに郷土に関して調査・研究を行っていた。鹿児島県立種子島高等学校教諭時代（1963年～1969年）においても同校に郷土研究部を作り、自らその顧問となった。

下野の高校教員としての経歴は昭和29年（1954）の鹿児島大学卒業から始まる。初任である種子島の鹿児島県立中種子高等学校へ赴任 、その後は種子島高校へと異動し 、トータルで15年間を

[1] 下野コレクションの現状について筆者らが行った鉄砲館への聞き取り調査（2023年９月７日）による。

高校教員として種子島で過ごした[2]。

この間、下野自身のフィールドワークに加え、教員という立場から生徒への指導を行った。その成果は中種子高校時代の中種子高校地歴研究部の部誌『種子島民俗』や、種子島高校時代の種子島高校郷土研究部の部誌『種子島研究』から確認できる。これらの研究成果は、高校生（すなわちプロフェッショナルの研究者ではない市井の若者）が作成したものとしては学術的にも価値があり、その内容も質量ともに素晴らしいものであると考えられている[3]。『種子島研究』の刊行は下野が種子島高校を退職した後も長く継承され、1987年（第24号）まで続いた（他に別冊が１冊存在していたことを確認している）。

だが、残念ながら『種子島研究』は冊子自体が多くは現存しておらず、残っていたとしてもそのコンディションは必ずしも良いとはいえない場合が多いと考えられる[4]。また、そのような状態であるため、例えばこの冊子を地域の学びに活用するという動きもほとんどみられない。

そこで筆者らは、下野の遺した貴重な遺産を探索し、可能な限り電子アーカイヴ化を行い、学校教育や社会教育における教材として活用できるようにすることを目的として調査および研究のプロジェクト活動を実施することを計画した。これは、「地域の財産」とも言うべき重要な文化資源を保全し活用を目指すものである。

まずはその第１歩として『種子島研究』に焦点を合わせ、以下のような活動を行いたいと考えている。すなわち、①冊子の所在と状態（コンディション）を確認する、②その通巻の内容を整理する（総目次の作成）、③可能な限り当時の執筆者を訪ねヒアリング調査を行う、④その内容の電子化を進めアーカイヴする、⑤このアーカイヴを活用するために必要な法的処理（権利関係）の整理を行う[5]、⑥実際に学校教育にこれを活用する、⑦将来的には種子島の地域活性化に資する活用の提案を行う、である。

なお、本プロジェクトは鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターが学内公募を行った令和５年度「地域マネジメント教育研究プロジェクト」の助成に基づいて実施するものである[6]。

Ⅱ．プロジェクトの計画

上記のように『種子島研究』はその保全と活用が充分とはいい難い。例えば西之表市立図書館にも全号が納められているわけではなく、種子島高校にも完全な形では保管されていない。地域における社会教育や種子島高校をはじめとする学校教育においてそれが大いに活用されたという事例も寡聞にして把握していない。

このような状況を踏まえ、『種子島研究』について探索を行い、整理し、電子アーカイヴ化した上で、まずは大学の教材として活用することを目指すものである。具体的には以下について取り組むことを計画している。

【表】『種子島研究』電子アーカイヴ化プロジェクトの工程

Ⅰ『種子島研究』の探索	①『種子島研究』の所在と状態の確認 ②『種子島研究』の内容の整理（総目次作成） ③『種子島研究』の執筆者訪問

[2] 下野敏見（2005）『南九州の伝統文化Ⅱ ―民具と民俗、研究―』南方新社、19-22頁。
[3] 研究者による研究論文にも『種子島研究』は引用されている。例えば松原武実（2023）「種子島盆踊歌集」鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第24号。
[4] 筆者らによる西之表市立図書館での調査（2023年９月６日～９月７日）による。
[5] 電子アーカイヴ化された著作物の二次利用に関しては大井将生、渡邉英徳（2023）「デジタルアーカイブ資料の活用を促進する二次利用条件」『デジタルアーカイブ学会誌』Vol. 7, No.3, 25-26頁に詳しい。
[6] プロジェクトの名称は「『種子島研究』の探索および電子アーカイブ化とその教育的活用」である。

Ⅱ『種子島研究』の電子アーカイヴ化	④『種子島研究』の電子アーカイヴ化作業 ⑤『種子島研究』の著作権等の法的処理
Ⅲ『種子島研究』の教育利用	⑥『種子島研究』を学校教育で活用 ⑦『種子島研究』を地域活性化に活用

（筆者作成）

Ⅲ．研究と調査に関する進捗

上記の①～⑦のうち、2023年11月現在、①および②までが完了している。③～⑤については2023年度中に可能な限り作業を進める予定であり、来年度にも継続しての実施を計画している。⑥および⑦については来年度以降に実現するつもりである。

①については、図書館等の検索システムを用い、鹿児島県立図書館、西之表市立図書館、鹿児島県立種子島高等学校図書室の蔵書についてチェックを行った。また、鹿児島県立図書館と西之表市立図書館には筆者である出口と日髙が実際に訪問し、実物を手に取って確認した[7]。

この結果、図書館における蔵書状況については以下の通りである。国立国会図書館では11号から19号が欠落していること、鹿児島県立図書館には別冊を除き全号が蔵書してあること、西之表市立図書館は13号が欠落していること、が確認できた。大学等の図書館においては、プリンストン大学に20号から24号が蔵書してあること、早稲田大学図書館に５号から９号が蔵書してあること。志學館大学に９号から11号、そして21号から24号の蔵書があること、が確認できた。また、種子島高校には19号と20号が蔵書してあることが確認できた。

②については、日髙による総目次が完成している（本稿にその一部を資料として添付する）。これをさらにブラッシュアップし、「まえがき」や「あとがき」を添えて冊子として刊行することを計画している。

③については、『種子島研究』に掲載されている部員名簿などの情報や種子島高校をはじめとする下野の教え子などからの伝聞情報に基づいて執筆者の現状を把握し、可能な範囲で訪問調査を行う。その際、高校教員としての下野敏見についての語りも記録したいと考えている。

④については、各種スキャナー等を用いてディジタル・データ化することを想定している。ただ、『種子島研究』の現存する冊子の保存状態によっては、手入力によるデータ化が必要であろうことが予想される。

⑤については、『種子島研究』刊行当時は恐らく意識されていなかったであろうが、電子アーカイヴ化したものも含め、同冊子を利活用する場合には著作権等について処理しておく必要がある。③における執筆者訪問の際に著作権者としての執筆者から利活用の了解を得るとともに、その他必要な法的処理について専門家も交え検討を行いたい。

⑥および⑦については、⑤までの作業を前提として、最適解としての利活用方法を提案したい。

Ⅳ．現時点での総括

ここまでみたように、下野コレクションは、その価値は大いに認識されながらほとんど活用されていないのが実情である。それらを探索し、丁寧にアーカイヴすることによって、地域においてその遺産を継承し保全していくことが可能となる。さらに、それを学校教育や社会教育において教材として活用することで、地域の若者や地域住民による地域の再発見などの地域活性化の一助にもなるものと考えている。

本プロジェクトはそのような課題意識に基づく活動の一環であり、『種子島研究』に関する取

[7] 鹿児島県立図書館には2023年９月15日～17日に訪問し、調査を行った。西之表市立図書館での調査は先述のとおり2023年９月６日～７日に実施した。

り組みはその端緒であると認識している。

この活動を通じて作成する電子アーカイヴは、まずは大学での教材としての利用を意図したものである。その最初の歩みとして、鹿児島大学における活用、例えば総合教育機構が展開する「地域人材育成プラットフォーム」や法文学部（地域社会コースなど）において教材として利用されることを考えている。また、将来的には種子島高校をはじめとする県内の高等学校における副読本としての利用や、西之表市立図書館と連携しての地域住民による活用の可能性にも期待している。

Ⅴ．結語

筆者らは、鹿児島大学 総合教育機構が管轄する「地域人材育成プラットフォーム」において実施されている「かごしま地域リサーチ・プログラム」を担当している。本プログラムの構成科目である「地域リサーチ実習」および「地域リサーチ・トライアル」という授業では学生が実際に地域でのフィールドワークを行う。その１つに安納芋（特にそのマーケティングやブランディング）を柱とした種子島フィールドワークがある。

本プロジェクトの端緒は筆者らがこの種子島フィールドワークを引率したことであった。このフィールドワークにおいて西之表市役所や鉄砲館の関係者と人間関係が築かれ、下野コレクションについて懇談があったことが本プロジェクトを興す大きなきっかけとなった。このような経緯から、西之表市役所および鉄砲館とは協調しながら活動を進めている。

また、『種子島研究』は鹿児島県立種子島高等学校における研究成果であることから、当然に鹿児島県教育委員会や種子島高校との協力関係も非常に重要である[8]。資料の取集や各種調査だけでなく、プロジェクトの成果としての電子アーカイヴを教育現場で活用することについても同校の協力は欠かせないものと考えている。

元より単年度の取り組みとして開始したプロジェクトではあるが、質量ともにその短い期間にまとめきれるものではなかった。実施計画を概ね３年間程度のプロジェクトに改め、調査・研究およびそのアーカイヴ化を進めていく予定である。

参考文献

大井将生、渡邉英徳（2023）「デジタルアーカイブ資料の活用を促進する二次利用条件」『デジタルアーカイブ学会誌』Vol. 7, No.3。
下野敏見（2005）『南九州の伝統文化Ⅱ ―民具と民俗 、研究―』南方新社。
松原武実（2023）「種子島盆踊歌集」鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第24号（１・２）。

資料

本プロジェクトの現時点での到達点を示すために、本稿に『種子島研究』総目次の一部を資料として添付する。　総目次は『種子島研究』第１号から第25号までのコンテンツを網羅したものであり、それだけで頁数にして100頁を超えるものとなっている。将来的には本プロジェクトにおいて冊子化する計画である。

本稿にはその全てを掲載できないため、冊子化した場合に「表紙」に当たる部分と、総目次の「目次」に当たる部分、そして第１号の「目次」を抄出して添付することとしたい。

[8] なお、現在の鹿児島県立種子島高等学校は2006年に（旧）鹿児島県立種子島高等学校と鹿児島県立種子島実業高等学校が統合されて開校した高校である。下野が教員を務めていたのは統合前の種子島高校であり、現在の種子島高校と全く同一の学校というわけではない。

表紙

鹿児島県立種子島高等学校
郷土研究部『種子島研究』総目次

第１号―第24号

冊子としての総目次の目次部分

目次

はじめに
第１号　下西の民俗特集　昭和38年（1963）11月20日…… 3
第２号　国上の民俗と歴史　昭和39年（1964）８月10日…… 6
第３号　住吉の民俗と歴史　昭和40年（1965）５月18日…… 9
第４号　安城・立山の民俗と歴史　昭和40年（1965）７月18日…… 12
第５号　南種子町下中・茎永・西之表の民俗　昭和40年（1965）12月20日…… 15
第６号　伊関・安納・現和の民俗と歴史　昭和41年（1966）４月１日…… 18
第７号　古田・中割地区の民俗と歴史　昭和41年（1966）９月５日…… 21
第８号　西之表の民俗と歴史　昭和42年（1967）６月１日…… 23
第９号　島間・野間・国上の民俗と歴史　昭和42年（1967）９月15日…… 29
第10号　平山・増田の民俗と歴史　昭和43年（1968）２月５日…… 33
第11号　国上・住吉・大川の民俗　昭和44年（1969）10月15日…… 36
第12号　茎永・現和の民俗　昭和46年（1971）２月…… 38
第13号　国上・伊関・馬毛島の民俗　昭和46年（1971）３月…… 40
第14号　島間の民俗　昭和48年（1973）３月…… 42
第15号　西之表市国上の民俗　昭和51年（1976）８月25日…… 44
第16号　西之表市の伝説　昭和53年（1978）９月19日…… 46
第17号　南種子町の伝説　昭和54年（1979）９月23日…… 49
第18号　中種子町の伝説　昭和55年（1980）９月…… 52
第19号　西之表市の甑島移住部落調査　昭和56年（1981）９月20日…… 54
第20号　西之表市の桜島・沖永良部・坊津町移住部落調査　昭和57年（1982）９月20日…… 57
第21号　我が郷土の偉人達　昭和59年（1984）３月24日…… 59
第22・23合併号　種子島の地名　昭和61年（1986）３月31日…… 60
別冊　種子島の教育・種子島の女性の生きかた　昭和61年（1986）11月…… 61
第24号　種子島の民具　昭和62年（1987）３月15日…… 63

編者あとがき

『種子島研究』第１号の目次

第１号　下西の民俗特集
鹿児島県立種子島高等学校郷土研究部発行

奥付
『種子島研究』第一号
発行日　昭和三八年十一月二十日
発行者（鹿児島県西之表市松畠）
鹿児島県立種子島高等学校郷土研究部
編集代表　鮫島洋二郎（二年）
印刷所　鹿児島市下竜尾町　やじろべ工房

※調査地域（下西小学校区）/ 昔の城之浜風景
※『種子島研究』発刊によせて　校長 里中晴吉　1
※表紙絵（八幡神社より西之表港を望む）八板辰夫先生
※題字　羽生勝露先生

目次　2
島の幻想　教頭 後庵重善　4
城之浜　柳田桃太郎　6
城之浜の椿事　後庵弥三郎　7

（川迎の民俗）　9
川迎部落の姓、氏神、家族、親類、結婚、贈物、歓待、悪口、着物、八幡様、地名
　話者 遠藤清三（75）
　調査者 中目敬子・才川イサ子
川迎の昔の食事、家屋、産、化け物、予兆、禁忌、虫払い、薬、子供の遊び方、子守歌、なぞなぞ、年中行事、地名
　話者 遠藤清三（75）
　調査者 春添幽里子・田畑宏子
日典上人の話、忍術使い、西之海碑文、労働聞書
　話者 遠藤清三（75）
　調査者 山下美保子・柳田富子

（池ン野の民俗）
池ン野部落聞書　18
（昔の食事、野生の食物、家屋、妖怪、ガラッパ、犬神、家建て、池ン野の由来）
　話者 鮫島さん（83）
　調査者 下園美和子・松井通子

（塗泊の民俗）　20

塗泊の昔の食事、家屋、産育、妖怪、がらっぱ、幸福予兆、天気予兆、忌言葉、民間薬、子供の遊び、童言葉、方言、人の一生、若宮神社、年中行事
　話者 塗川長七（65）
　調査者 浦口チズ子・岡村裕子・宮山敬子
塗泊の船祝い歌、漁業、部落の名称由来、姓、氏神、家族、相続、呼称、婚姻、贈物、人のうわさ、衣、染料
　話者 塗川長七（65）川下正之蒸（満24）一葉チヨ（88）
　調査者 竹原カツ子・小川由美子

（石寺の民俗）30
上石寺の名称由来、姓、氏神、行事、宗派、家族、相続、隠居、呼び名、あだ名、分家と本家、婚姻、贈り物、歓待、人物評、衣類、言い伝え、地名
　話者 遠藤友二（83）
　調査者 牧瀬マリ子・国岡玲子
下石寺の名称由来、姓、氏神、からいも伝来、八幡さま、家族、隠居、呼称、親族、結婚、贈物、歓待、衣類、染料
　話者 寺野太兵衛（81）
　調査者 川端裕子・清水美代子
下石寺の食事、お産、化け物、幸福、不幸の予兆、禁忌、民間薬、
子供の遊び、なぞなぞ、年中行事
　話者 寺野太兵衛（79）
　調査者 石橋順子・本田敦子

（下西関係史料）
下西史料（種子島家譜下西関係抜粋）郷土研究部　47
王之山祠堂記（前田豊山筆）鮫島洋二郎・遠藤清人 54
下西史料（種子島家御家年中行事属類雑記下西関係抜粋）郷土研究部　56
下西史料（「懐中島記」下西関係抜粋）郷土研究部　58
下西宗教史料（「熊毛郡宗教史資料」抜粋）郷土研究部　59
上石寺塩屋牧地記念碑文、慰霊塔碑文、若狭公園由来、日葡親交紀念碑文
　上妻セツ子・寺田房子・宮園徳子　62
（小説）殉難日典上人（「無上道」転載）松井日宏　64
下西民俗探訪記 鮫島洋二郎　77
下西民俗探訪スケッチ　石橋順子　78
編集後記　鮫島洋二郎　82
郷土研究部写真、及び郷土研究部員名簿　83

Abstract

The Electronic Archiving of Community-Based Research and Its Educational Utilization
- Focused on the Initiatives by the Students of Upper Secondary School in Tanegashima Island -

Keywords: Municipal Research, Regional Research, Electronic archiving, Regional Revitalization

Shimono, Toshimi (1929-2022), a leading folklorist in Kagoshima Area, left behind a large collection of books and folklore materials related to the region. Currently, of the vast amount of materials, those related to Tanegashima Island are in the possession of Nishinoomote City and under its control, awaiting arrangement.

When Shimono was an upper secondary school teacher, he was posted to various places in the prefecture, where he established a locality research club and conducted research on his hometown with his students. When he was a teacher at a school in Tanegashima Island, he also established a local studies club at the school and compiled the results of his research in a booklet entitled "Tanegashima Kenkyu" (It means "Study on Tanegashima Island"). "Tanegashima Kenkyu" was praised as having excellent content, both in terms of quality and quantity, for a work written by secondary school students.

However, exactly 60 years have passed since the first issue of "Tanegashima Kenkyu" was published, and not many of the booklets themselves are still in existence, and those that are left behind are not necessarily in good condition. In addition, because of this state of affairs, there has been little movement to utilize the booklets for learning and revitalizing the local community.

In light of the above, we will conduct surveys and research activities with the aim of exploring the valuable heritage of Shimono, archiving it electronically as much as possible, and making it available as educational material for school and social education. This is a project that aims to preserve and utilize important cultural resources that are "community assets".

As a first step, we will focus on the above-mentioned "Tanegashima Kenkyu" and conduct the following activities. The following activities will be undertaken: (1) checking the location and condition of the booklets, (2) organizing the contents of the volumes (creating a general table of contents), (3) visiting and interviewing the authors as much as possible, (4) digitizing and archiving the contents, (5) organizing the legal procedures (rights) necessary for utilizing this archives, (6) actual using the archives for school education, and (7) in the future, using the archives for the activities to contribute the regional revitalization in Tanegashima Island.